



Data

監督・製作: 馮小剛 (フォン・シャオガン)

原作・脚本: 巖歌苓 (ゲリン・ヤン)

出演: 黄軒 (ホアン・シュエン) / 苗苗 (ミャオ・ミャオ) / 鍾楚曦 (チョン・チュウシー) / 楊采鈺 (ヤン・ツァイユ) / 李曉峰 (リー・シャオファ) / 王天辰 (ワン・ティエンチェン) / 蘇岩 (ヤン・スー) / 趙立新 (チャオ・リーシン)

👁️👁️ みどころ

山田洋次監督の最新作は『男はつらいよ』シリーズの第50作目だが、“中国の山田洋次”こと馮小剛(フォン・シャオガン)監督の最新作は、自らの文工団時代を振り返る青春群像劇。邦題も『芳華』としたが、中国語の『芳華』の意味と、英題の『Youth』の意味をしっかりと考えたい。

1970年の日本では『戦争を知らない子供たち』が大ヒットしたが、中国は文化大革命の真っただ中。すると、物語が始まる1976年の文工団での青春は? 1990年代の青春群像劇だった、趙薇(ヴィッキー・チャオ)監督の『So Young~過ぎ去りし青春に捧ぐ~』(13年)とは全く異質な、1970年代の文工団の若者たちの青春群像劇をしっかりと確認したい。

しかし、毛沢東が死亡し、文革が終焉すると?そして、中越戦争が起きると?時代が激変する中で、必然的に「勝ち組」「負け組」に分かれた文工団の若者たちの、新たな生き方は・・・?

自らの文工団での体験を元にした馮小剛監督の渾身の一作を心ゆくまで味わいたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■馮小剛監督最新作は必見! 4000万人が涙を! ■□■

本作のチラシには、「ヴェネチア、トロントなど数々の映画賞を獲得した巨匠フォン・シャオガン監督最新作」、「4000万人が涙した、美しく切ない青春ラブストーリー 1970年代の中国—激動の時代に軍歌劇団として前線で生きる若者たちがいた」の見出しが躍っている。私が、中国の山田洋次監督と呼ばれる馮小剛監督の映画を最初に観たのは、

2005年のお正月映画である『イノセントワールドー天下無賊ー』(04年)。それは、楽しさいっぱいで、馮小剛監督特有の人間に対する温かい視点に溢れていた(『シネマ17』294頁)。その後の、『女帝 エンペラー』(06年)(『シネマ17』298頁)も『戦場のレクイエム(集結號)』(07年)(『シネマ34』126頁)もすばらしかった。

1949年生まれ私は1967年に大阪大学に入学したから、学生運動の激動期中で過ごしたその時代が私の青春時代だが、1958年生まれ馮小剛監督は20歳で中国文芸工作団(文工団)に入団したときから、彼の青春時代が始まったらしい。本作の原作と脚本を書いたのは巖歌苓(ゲリン・ヤン)だが、彼女も12歳から20歳まで文工団に所属してバレエを踊っていたそうだから、2人の青春時代は1970年代の文工団にあるわけだ。中国の四大名旦(中国四大女優)の1人である趙薇(ヴィッキー・チャオ)は『So Young〜過ぎ去りし青春に捧ぐ〜』(13年)(『シネマ34』385頁)で大学時代である1990年代を自分の青春時代として瑞々しく表現したが、馮小剛監督は自分と巖歌苓の1970年代の青春時代を本作で表現したわけだ。阿久悠が作詞し、森田公一とトップギャランが歌った1976年のヒットソング「青春時代」はすばらしい曲だったが、誰もが持っている「青春時代」のすばらしさ(と儚さ?)を、本作でしっかり味わいたい。

■文化大革命をどう考える?文工団での青春は?■

1966年に毛沢東が始めた文化大革命は、日本では「失敗だった」という評価が定着しているが、毛沢東を建国の祖とし、毛沢東思想を国家の根本思想としている中国では、毛沢東批判は御法度。しかし、そんな中国でも『芙蓉鎮』(87年)(『シネマ5』91頁)や『青い楓』(93年)(『シネマ5』98頁)のように、ハッキリ文化大革命を批判した名作があるし、『さらば、我が愛/霸王別姫』(93年)(『シネマ5』107頁)や『活きる』(94年)(『シネマ5』111頁)のように、やんわりと文化大革命を批判した名作もある。

他方、文芸工作団は人民解放軍の部隊の1つで、兵士の士気高揚のために慰問したり、党の政策の宣伝を行う歌舞団や劇団だが、文化大革命が始まった1966年から70年代にかけては、男女を問わず中国の若者たちにとって、この文芸団に入るのは、日本の若い女の子が宝塚歌劇団に入団するのと同じように大きな憧れだったらしい。したがって、馮小剛監督も巖歌苓もこの文芸団に入団できたことによって、輝かしい青春時代が始まったわけだ。そして、それは本作の主人公になる、模範兵の劉峰(リウ・フォン)(黄軒(ホアン・シュエン))も、文革が終わる直前の1976年に17歳で入団してきた何小萍(ホー・ジャオピン)(苗苗(ミャオ・ミャオ))も同じだ。しかし、中国が激動した1970年代半ばから80年代にかけての、楽しく華やかな青春時代になるはずの文工団での青春は・・・?

■青春群像劇は名作ぞろい!■

前述した趙薇監督の『So Young～過ぎ去りし青春に捧ぐ～』は、1990年代の中国の若者たちの青春群像劇。中国映画には青春群像劇は少ないが、台湾映画では『九月に降る風』(09年)、『シネマ34』373頁)、『あの頃、君を追いかけた』(11年)、『シネマ34』377頁)、『南風』(14年)、『シネマ34』381頁)のような青春群像劇が多い。日本では、私が中学生時代によく観ていた日活の吉永小百合、浜田光夫コンビの多くがそうだったし、石坂洋次郎の原作を映画化した『青い山脈』(49年)はその代表。また、黒澤明監督の『わが青春に悔いなし』(46年)も戦争が迫ってくる暗い時代下での青春群像劇だ。

馮小剛監督と巖歌苓の体験を元にした、1970年代の文工団での青春群像劇である本作には、劉峰と何小萍という2人の主人公の他、小穂子(シャオ・スイツ)(鐘楚曦(チョン・チューシー))、林丁丁(リン・ディンディン)(楊采鈺(ヤン・ツァイユ))、郝淑雯(ハオ・シューウェン)(李曉峰(リー・シャオフアン))、陳燦(チェン・ツァン)(王天辰(ワン・ティエンチェン))が登場し、それぞれ重要な役割を果たすので、それに注目!

■□美しい歌舞の姿に大興奮!しかし、時代の激変は?■□

「お話しするのは私たち文工団の物語」と、文工団での懐かしき青春時代を回想し語り始めるのは、1970年にダンサーとして入団した小穂子。そして、物語は、父親が文革のために迫害されていることを隠してやっと文工団に入団してきた何小萍を、先輩の劉峰が迎えにいくところから始まる。父親を労働改造所に送られてしまった何小萍は、実父の姓を捨てて継父の姓に変えることによってやっと入団できたそうだから大変。何ゴトにも人のために尽くすタイプの劉峰は、1962年に22歳の若さで殉職した人民解放軍の工兵で、何ゴトにも勤勉で自己犠牲を惜しまなかった雷鋒(ライフェン)の2世と呼ばれ、模範兵とされていたから、当然、何小萍に対しても優しく親切だった。何小萍自身も、入団すればこれまでとは違う全く新しい自由な世界が広がると確信していたが、残念ながら美人で評判の林丁丁から「臭い」と言われたり、“軍服無断借用事件”や“スポンジのブラジャー事件”等によって、同室の林丁丁から陰湿ないじめに遭うことに。

若い男女が集団生活をしていけば、さまざまな問題が起きるのは当然だが、本作導入部では、そんな陰湿ないじめを含めた青春時代のエピソードが次々と描かれていく。そんな物語も面白いが、そこで圧倒されるのは、スクリーン上で展開される厳しい練習風景と、そこに見る文工団の歌舞の美しさだ。私は、小学生の時にはじめて宝塚で「椿説 弓張月」を観た時から、宝塚歌劇を大好きになったから、何小萍たち文工団の若いダンサーたちの踊りの美しさには、頭がクラクラするほど大興奮。もちろん、文工団の技能はダンスだけでなく、歌や楽器でもトップクラスだから、林丁丁の歌唱や郝淑雯のアコーディオン、陳燦のトランペット等の見事さにも注目したい。

そんな姿を見ていると、文工団の活動は宝塚歌劇団と同じように50年、100年と続いていくように思われたが、1976年9月に毛沢東が死亡すると、予定していた公演が

2週間中止される等、文工団にはさまざまな影響が……。さらに、1976年は毛沢東の死亡の他、1月に周恩来が死亡、7月に唐山大地震が発生、10月に江青、王洪文、張春橋、姚文元のいわゆる四人組の逮捕と事件が相次ぐ年となった。そして、更に1977年から1978年にかけて中国は大きな時代の変化の波を受けていくことに……。ちなみに、この時代の私は、1974年に弁護士登録し、1979年に独立した、前向き一辺倒の時代だったが……。

■□私たちは「戦争を知らない子供たち」だが、中国は？■□

北方四島の「ビザなし交流」の訪問団に参加した「日本維新の会」の丸山穂高衆議院議員が、元島民に対して戦争で島を取り返すことの是非などを質問したことには、ビックリ！

「日本維新の会」は直ちに彼を除名処分にしたが、議員辞職を巡っては現在紛糾中だ。私たち団塊の世代が学生運動に力を注いでいた1970年に流行った曲の1つが、ジローズが歌った「戦争を知らない子供たち」。戦後74年間ずっと平和が続いてきたのが憲法9条のおかげかどうかは別として、日本に戦争が1度もなかったのはありがたいこと。そのため、ベトナム戦争が世界中の注目を集めていた時代に、私たち日本の若者たちは、「戦争が終わって 僕等は生れた 戦争を知らずに 僕等は育った おとなになって 歩き始める 平和の歌を くちずさみながら 僕等の名前を 覚えてほしい 戦争を知らない 子供たちさ」とギターを弾きながら歌うことができた。また、本作を観ても、前述の中国映画を観ても、1970年の中国は文化大革命の真ただ中にあり、知識人をはじめとする多くの人が塗炭の苦しみを味わっていた時代だが、1972年に田中角栄首相によって日中国交回復が実現するまでは、そんな中国の情報は遠い国の出来事に過ぎなかった。そして、私が弁護士登録をした1974年の2年後の中国は前述の激動が相次いだし、1979年12月には何と中国がベトナムと戦った中越戦争のシーンが登場するので、それに注目！

中国では「対越自衛反撃戦」と呼ばれている「中越戦争」は、大量虐殺を起こしたカンボジアのポル・ポト政権に、ベトナムが軍事介入したことをきっかけに起きたもの。ポル・ポト政権を支持していた中国は、元々ソ連寄りだったベトナムとの関係が悪化したため、当時の中国の最高指導者鄧小平はベトナムへの「懲罰」として人民解放軍を派遣することを決定した。ところが、実際はベトナム戦争を戦った百戦錬磨のベトナム軍の前に、中国人民解放軍は多くの犠牲者を出して、軍事的に完敗を喫したのが真相らしいから、中国にとっては屈辱の1コマだ。しかし、なぜ文工団の青春群像劇に『プライベート・ライアン』の戦闘シーンを彷彿させるような激しい戦闘シーンが登場するの？それは、林丁丁に対する愛の告白問題を起こした劉峰が、懲罰として中越戦争の最前線に送り込まれたため。また、そんな劉峰の善良さを信じている何小萍は、たった1人で劉峰を見送ったが、何小萍自身もそれによってあれほど希望と期待を持っていた文工団を自ら見限ることに。そのため、何小萍も慰問の舞台にダンサーとして登ることを拒否したことの懲罰として、最前線

の野戦病院に移動させられたためだ。

1979年の私は7月に独立して事務所を持ち、夢と希望をいっぱい新たな弁護士活動を展開していた時代。そんな時代に、中国とベトナムの国境では、劉峰も何小萍も命をすり減らしながら激しい任務に従事していたわけだ。そんな中越戦争の中で、文才を見込まれてダンサーから記者への転身を命じられた小穂子が何小萍に再会できたのはラッキーだったが、劉峰は部下を守る戦闘の中で、命こそ助かったものの右腕を失ってしまうことに。1979年の日本と中国はこれだけ大きく違っていることを本作でしっかり確認し、現在の日本の平和の意味をしっかり確認したい。

■□■宝塚歌劇団は100周年！文工団は1980年に解散！■□■

毛沢東が死去し、文化大革命が終焉した後、1978年には北京電影学院が再開した。その第1期生として入学したのが、張芸謀（チャン・イーモウ）、陳凱歌（チェン・カイコー）、田壯壯（ティエン・チュアンチュアン）たちで、その後の中国映画の躍進ぶりは『シネマ 5』等で解説したとおりだ。ちなみに、2014年に100周年を迎えた宝塚歌劇団は、宝塚大劇場で「宝塚歌劇100周年記念式典」を開催し、今なお発展を続けている。しかし、栄えある文工団は密かに噂されていたとおり、1980年には“解散”が決定したから、団員たちの苦悩は深いし、それぞれの思いは複雑だ。文工団最後の公演は戦争で傷を負ったり、精神を患った兵士たちを対象とした特殊なものになったが、何とその観客席には精神病を患ったためドクターと並んで座る何小萍の姿が。これは野戦病院で働いていたときに受けた大きなショックが原因だが、そこでは現実にはありえない、映画ならではの美しいシーケンスが登場するので、それに注目！

さらに、原作者の巖歌苓（ゲリン・ヤン）を本作で体現している小穂子は本作のストーリー進行役を務めているが、中盤には、稽古中に事故に遭い、金で金歯を作らなければトランペットを吹けなくなってしまった陳燦への思いが告白される。さて、その恋の行方は・・・？長い間の文工団での青春劇の中には、そんな小穂子の思いを含め、さまざまなものがある。そのため、解散の食事会ではあちこちの輪で話が弾み、歌声が流れるが、一方では涙を流す姿もあちこちで・・・。そんな状況下、文工団の各自は自分の今後を考え、それぞれ身の振り方を考えていくわけだが、今の日本流の「勝ち組」「負け組」の分類でいえば、劉峰も何小萍もどうやら負け組。それに対して、劉峰から思いを告白されながら、ウソの供述をすることによって劉峰を保安部の事情聴取に回してしまった八方美人型（？）の林丁丁は今、大金持ちの華僑の男との結婚が決まっているそうだから、勝ち組？

そんな風に運命が分かれていく中、今や誰もいなくなった文工団を訪れていた劉峰は、一人残っていた小穂子と再会。そして、あの懐かしい何小萍の部屋の中で、床下からビリビリに破られた何小萍の軍服写真を発見！考えてみれば、この軍服写真を撮るための軍服無断借用事件が文工団での青春群像劇の始まりだったが、今更それをつなぎ合わせて1枚

の写真を再現させることに何の意味があるの？そう思わなくもないが、いやいや・・・！

■□■タイトルをどう理解？ノスタルジアの中、涙いっぱい■□■

本作は、邦題も原題と同じ「芳華」とされているが、芳華という日本語と中国語の芳華はかなり違っている。キネマ旬報4月下旬号のきさらぎ尚氏の「共にあった青春、そして人生は続く」によると、原題の「芳華」は芳しく咲く華。つまり、「国が激動する時代であろうとも、その時を過ごした青春期は人生における芳しい華というわけだ。」と解説されている。また、英題の「Y o u t h」がすばり主題。そして、本作の何小萍は原作者、巖歌苓の、劉峰は馮小剛監督の「分身にして代弁者か」と書かれている。本作前半の文工団の青春群像劇を見ていると、まさにいじめや多少のいざこざを含めて、そのすべてが「Y o u t h」だと感じることができる。その楽しさと懐かしさは、趙薇監督の『So Young～過ぎ去りし青春に捧ぐ～』と同じだ。しかし、懲罰として中越戦争の最前線への異動を命じられた劉峰と何小萍が、一方は傷痍軍人になり、一方は精神病患者になるという悲劇によって、その後の人生が「負け組」になってくる展開を見ていると、青春群像劇の楽しさとノスタルジアを離れて悲痛感が生れてくる。

「4000万人が涙した」という本作の評論は多いが、私が注目し感心しながら読んだのが、ネットで見た、共同通信社記者の古畑康雄氏の「ある中国映画大ヒットの背景に見える「失われた世代」の傷痕」だ。そこでは、「置き去りにされた中越戦争」と題して、「多くの元兵士らは革命戦争のように英雄として賞賛されることもなく、多くは体や心に深い傷を残したまま、歴史の中に置き去りにされ、さらに改革開放後の経済の高成長に彼らの多くは取り残され、十分な補償も得られていない。このため、中越戦争などの退役軍人による抗議デモが各地で頻発している。」と書かれ、「中国の傷は癒えない」と題して、「この映画を見る多くの世代が「銀髪族」、つまりはシルバー世代であり、彼らは映画を見て涙を流した。政治的動乱や戦争に短い青春を奪われた思いが共通するのだろう。」と書かれている。まさに同感だ。

本作は1980年に文工団が解散された後、1991年に小穂子が劉峰と再会する姿を描き、さらに1995年に再開した劉峰と何小萍が雲南省の蒙自で亡くなった戦友たちの墓参りをするシークエンスで終了する。小穂子の語りが「老いた姿を皆さんに見せたくないから、銀幕には輝く華の時を留めよう」で終わることには納得だが、劉峰と何小萍は結婚しなかったものの、老後は2人で寄り添って生きたいらしい。そんな2人の主人公の青春を核として描き、「芳華」と題された本作は、まさに馮小剛監督渾身の一作。そのすばらしさを心ゆくまで味わいたい。

2019（令和31）年5月20日記